

## 小平市議会定例会一般質問通告書

質問件名 管理を容易にするための制限強化ではなく、本当の教育を

質問要旨

つい最近、小平市立の小・中学校で起きている事例を紹介する。それぞれ別の学校で起きており、気温が高い日の出来事が多い。氷山の一角と捉える必要がある。

- ・ 下校途中、ある児童が、マスクを着けていない児童に対し「マスクを外してはいけない」と注意し、言われた児童がうつむいていた。
- ・ 運動会に向けた大縄跳びの練習で、生徒ほぼ全員がマスクを着けたまま跳んでいた。
- ・ 屋外を1時間以上歩いて移動する授業で、先生から事前に「基本的にマスクの着用をすること。苦しい場合は横を向いて深呼吸をしてもよい。」という指示があった。その移動中、マスク着用を強いられていることに憤慨したり、顔が赤くなったり、見るからにつらい様子の児童が何人もいた。具合が悪くなる児童もいて、途中で帰ることになった児童もいた。
- ・ 運動会の徒競走で、4クラスのうち、3人以外全員がマスクを着けたまま走っていた。
- ・ 先生から「苦しいときはマスクを外してもよい。マスクを外している子がいても事情があるかもしれないから注意しないこと。ただ、しゃべっていたら注意してもよい。」という指示があった。また、体育の時間に「苦しいときはマスクを外してもよい。でもしゃべらないこと。」という指示があった。

本年3月定例会では、上記のような状況も憂慮し、請願第12号が全会一致で採択されている。市教育委員会はこの請願事項を一部ガイドラインに反映した。

また、本年5月20日の記者会見で、厚生労働大臣が次のように述べている。「屋外で身体的な距離が確保できない場合で、会話をほとんど行わない場合、こうした場合は、元々（マスクを）外してよいという考え方ではありました」。過去の厚生労働省の方針から判断すれば、正しい発言だと私も思う。

それなのに、なぜ、未だにこの状況があるのか。市長や教育長を始め、教育委員会、校長の消極的姿勢や、不当な制限の強化も一つ大きな要因で、つまり、大人の都合や組織運営上の都合が最優先され、子ども中心の視点が欠落している。そんな疑念を持たざるを得ないことから、市に問う。

1. 市は、上記した子ども達の状況を、問題だと認識しているか。
2. 内閣官房の新型コロナウイルス感染症対策の基本的対処方針にも「会話をほとんど行わない場合は、マスクの着用は必要ありません。」とある。これについて教育委員会に尋ねると、子どもには「ほとんど」の判断がつきにくいので、「会話をしない場合は」と捉えている、といった説明があった。これは、国がゼロではないと言っているものを、根拠なくゼロにして制限を強くする不当な行為だ。また、仮にこの部分を「マスクを着けない場合は、会話を控える」とすることも、消極的制限を積極的制限に変えることになり、市は特に黙食についてこの間違いを犯したままだが、やってはならないことである。説明しやすいからという理由で安易に制限を強くするのではなく、なぜ「ほとんど」という表現を用いているかを、子ども達ができるようにきちんと説明することこそ、本当の教育ではないのか。市の見解を問う。
3. 国の方針に基づいて感染症対策を行っている市長や教育長として、首相がマスクを外して海外の高齢者も含めた人々と接している一方で、子ども達には原則マスク着用を求めているという、一見して矛盾した状況を、どう捉え、どう説明するか。

上記のとおり、小平市議会会議規則第57条第2項により通告します。

令和4年5月30日 小平市議会議員 殿 氏名 安竹 洋平

受付番号【     】
